漢語語彙史の研究
――「無端」を中心に ――

佐々木　　舜

京都大学大学院　人間・環境学研究科　共生文明学専攻
〒 606-8501　京都市左京区吉田二本松町

要旨　本稿では，日本語語彙における和語・漢語間の交渉の史的様相や相互関係の具体相を明らかにするという目的のもと，漢語と種々の和語が対応したケースとして「無端」を取り上げ，当該の対応関係が構築される通時的経過や，それら語群の影響関係等について，検討した．

「無端」の訓としては中古以降，「あぢきなし」や「はしなし」が現れるが，中世には五山文学での「無端」の用法を背景に，訓としての「はしなし」が漢語「無端」の「思いがけず」という意味を表すようになる．この「はしなし」の変化を契機として，原義としては「無端」から離れた「はしたなし」も「無端」に対応するようになり，この時期には「あぢきなし」,「はしなし」,「はしたなし」が「無端」と関わる形で並存するようになるが，これらの和語間における意味領域が重なる文脈において「無端」が存在する場合，当該の和語の対応関係には揺れが生じるとともに，意味領域が重ならない範囲では表記と訓において一定の弁別がなされた．近世になると「思いがけず」を意味する「はしなし」が一般化し，また「はしたなし」にも当該の語義が認識されるようになるが，これは節用集等で「はしたなし」が「無端」と明確に対応するようになったこととも関連して，両者の近接化を示している．

漢語「無端」と和語との対応を巡っては，意味的な対応関係のみならず，漢語とは別次元の和語間の関係性といった要因も作用し，そのことが漢語・和語の訓読や表記，語義に副次的な影響を与えている．また，意味領域の重なりに応じて漢和の対応関係に峻別や揺れが生じるという，語間における一定の並存関係も構築されていることがわかる．漢語と和語が種々の要因を含みながら複層的な関係を形成しているという点で，漢語・和語の交錯関係の実態に迫るうえでの示唆的な例であるといえる．

は　じ　め　に

日本語語彙史における漢字・漢語に対する特定の和語の対応という現象においては，和語間による派生関係や和語による仲介を契機とした新たな漢語・和語の対応関係の構築，およびそれによる漢語への副次的影響といったさまざまな過程が想定され，そのような過程が複合的に作用した結果，ある漢字・漢語に対する幾通りもの和語の対応や，複数の漢字・漢語に対する同じ和語の対応，および漢字・漢語の基本的・常用的な意味と整合しないような和語の対応といったことが生じる．このような対応関係がどのように構築されていったのかや，それらの語群は相互にどのような意味的影響関係を持つのか，またどのような形の共存・並存がなされるのかということを検討する作業は，日本語語彙における和語・漢語の交渉の史的様相や相互関係の具体相を明らかにするうえでの課題であるが，この課題に漢語・和語双方の側面からアプローチした研究は未だ十分とはいえない．

そこで本稿では，そうした研究の一環として「無端」という漢語とそれを取り巻く和語を取り上げ，それら語群の関係性を検討していく．

ここで，「無端」についての問題点を確認しておく．例えば，次の『太平記』の例に注目したい（本文は日本古典文学大系による）．

宮ニ追着進セント急ケルニ，芋瀬ノ庄司無レ端道ニテ行合ヌ　（巻五，大塔宮熊野落事）

太字部の「無端」について，『太平記』の慶長8年古活字本に依拠した日本古典文学大系では訓「ハシナク」であるが，他の諸本では，例えば西源院本は「ハシタナク」，玄玖本は「無端」，神宮徴古館本は「端ナク」となっており，訓や表記が揺れているのがわかる．このうち，「はしなく」については，『角川国語大辞典』（以下『角川』）に，

・「も」を添えても用いる．漢語『無端』の訓読に由来する．これという理由もなく．卒爾に．ゆくりなく

とある．また『日本国語大辞典』（以下『日国』）には，

・思いがけなく，偶然であるさまを表す語．はからず．ふと．ゆくりなく．

とあって，漢語「無端」の訓読語として「思いがけなく」や「ゆくりなく」といった意味を表す和語とみなすことができ，また先の『太平記』の例においても当該の意味で解釈して概ね文意は通る．しかし，右の諸本からはその他「はしたなし」や「あぢきなし」とも対応しているのが注目され，ここからは，「無端」という漢語に対して種々の訓読のあり方や和語との対応のあり方が存在していたことが窺える．本稿で詳細に検討するが，これら和語群のうち「はしなし」と「あぢきなし」は「無端」との意味的対応に基づいた訓読語とみなすことができるが，「はしたなし」は必ずしも漢語「無端」の原義と対応するわけではなく，その対応関係の要因はまた別に考えなければならない．加えて，『太平記』諸本で訓に揺れが生じているということは，これらの和語群が単純な弁別的関係を構築していたわけではないことをも示唆しており，その並存形態は追及すべきであると考える．

すなわち「無端」を考えるうえでは，「無端」に対する和語対応の経過および背景，そして「無端」に対応する和語群の並存の実態および相互影響という点が問題となり，これらの問題は先に挙げた漢語と和語に関する課題にアプローチするうえで有益な材料を提供していると考える．

以下では，漢語と和語群相互の関係構造を明らかにするという目的意識のもと，それが有意に確認できる和語群として「あぢきなし」，「はしなし」，「はしたなし」に主に焦点を当て，それらが南北朝・室町期に至るまでどのような経過を辿るのかを検討した後，当該期における『太平記』の用例を中心に和語群の並存の内実を分析し，そのうえで近世において「無端」と和語群において相互にどのような影響が及んだかについても言及していく．

1，漢語「無端」

まず前提として，「無端」という語の，漢語としての原義を確認していく．「無端」は中国でも古くから用いられる語であり，漢籍等に用例が確認できる．

まず次の用例が挙げられる．

①奇正之変，不レ可二勝窮一也，奇正相生，如二循環之無端一　（『孫子』勢篇）

②太子公曰，兵以レ正合，以レ奇勝，善レ之者出レ奇無窮，奇正還相生，如二環之無端一　（『史記』田単列伝第二十二）

『史記』の文言は『孫子』のそれを踏まえたものである．この部分に関し，『十一家注孫子』では「何氏曰，奇正生而転相為レ変，如下循一二歴其環一求二首尾一之莫上レ窮也」と注し，『史記索隠』は「言レ用二兵之術一，或用二正法一，或用二奇計一，使二前敵一不レ可二測量一，如下尋二環中一不レ知中端際上也」と注している．すなわち環状のものには「端際」がないことに例えて，兵法の「奇正」には「首尾」＝「始まり」・「終わり」もなく測り難いことを表している．このように「無端」は物事の「始まり」や

「終わり」あるいは「果て」がないことを表しており，例えば『淮南子』の「是非無端，孰知二其所レ萌一」（俶真訓）は前者の意味を表す他，『文選』の「視レ之無端，察レ之無レ崖」（司馬相如，上林賦）は張銑注に「銑曰，視察不レ見二際畔一．言レ廣也」とあるように，後者の意を表す．

これらの他に中国における用法を見てみると，以下のようなものがある．

③張忠怨レ璆，與二諸閹官一構二一造無端一
（『後漢書』楊李翟応霍爰徐列伝第三十八・徐璆伝）

④至二於鉤黨之釁一，事起二無端一，虐レ賢傷レ善，哀及二無辜一
（『後漢書』皇甫張段列伝第五十五）

⑤結髪辞二厳親一，来為二君子仇一，恪勤在二朝夕一，無端獲二罪尤一
（『玉台新詠』曹植・浮萍篇）

③は「根拠のないこと」をでっち上げたという意味で，④は，事態は「根拠もなく」起こったということを意味しており，それぞれの「無端」は「根拠のない」あるいは「謂われのない」という意味を名詞的および副詞的に表している．これは，物事の「始まりがない」ということが事態発生に関わる根拠の不分明性を表すことにつながったのであろう．⑤も同様に「謂われなく」罪を得たという意味である．

また，『文選』には次のような例がある．

⑥精交接以来往兮，心凱康以楽歓，神独亨而未レ結兮，魂煢煢以無端，含二然諾一其不レ分兮，（宋玉，神女賦）

これは宋玉が夢の中で出会った巫山の神女との関係性を詠んだ賦であるが，2 人の心は交わるものの魂は孤独のままで「無端」であり哀しいと述べている．李善注はこの部分を「未レ結，猶未二相著一煢煢然無レ有二端次一．不レ知二何計一．」とする．「端次」は現行の辞書等にも記載がない語であるが，その後の「不知何計」における「計」を『漢語大詞典』記載の「計策」などの意でとれば，ここでの「無端」は「計策・方策がない」というように解釈できる．すなわち『漢語大詞典』所収の「無端」における「无奈．表示事与愿违，或没有办法」という意味に該当しよう．日本語にするならば「どうしようもうない」，「しかたがない」といった意味である．

唐代以前における「無端」の主たる意味用法は以上の通りであるが，唐代の漢詩文においては以下のような例が見られる．

⑦無端盗賊起，忽已歳時遷
（杜甫「歴歴」，『杜甫全詩訳注（三）』講談社，2016 年より）

⑧無端更渡桑乾水，卻望二并州一是故郷
（賈島「度桑乾」，『新釈漢文大系 19　唐詩選』より）

⑦は玄宗の治世を振り返り，「思いがけず」盗賊（安禄山）の乱が起こったと述べており，⑧は并州にいた作者が「思いがけず」桑乾河（盧溝河）を渡ってさらに北方に行くことになってしまったと言っているものである．これらにおける「無端」はいずれも「思いがけず」とか「はからずも」といった意味を表しており，冒頭で述べた和語の「はしなく」の意味と近しいものである．このような意味での「無端」の確例は唐代以前の中国において見られないものではあるが，事態発生に関わる根拠の不分明性という意味が，事態発生の突発性および意外性の意味へと拡張した結果と考えれば，「無端」は当該語義を前代から潜在的に有していたと見てよいと考える．実際，⑤の用例においては「思いがけず」罪を得たと解釈しても大きく文意は損なわれず，2 つの意味の連続性が認められる．

以上のように，中国における「無端」は「果てがない」や「始まりがない」といった意味に加えて，「根拠がない」や「どうしようもない」，そして「思いがけない」といった種々の意味を有していたことが確認できる．

こうした漢文脈での「無端」は，日本において特に中古の漢詩文等に散見される．

⑨雖レ忘二容儀一難レ可レ問，不レ知二遙意一怨無端

（『経国集』楊泰師，夜聴㆓擣衣㆒一首）

⑩月転㆓孤輪㆒満㆓百城㆒，無端悩殺客中情

（『菅家文草』冬夜対㆑月憶㆓友人㆒）

⑪思㆑家一事乱無端，半畝華園寸歩難

（『菅家文草』対㆓残菊㆒詠㆑所㆑懐，寄㆓物忠両才子㆒）

⑫不㆑放㆓行看賞㆒，無端坐望憐

（『菅家後集』東山小雪）

⑨は，遠方にいる夫が故郷の妻を想ったもので，妻の姿を忘れたとしてもその様子を尋ねるのは難しく，遙意（妻の心中か）もわからない今の状況へのうらみは限りない，という意味である．ここでの「無端」は形容詞的に「果てがない」ことを表している．また⑩は，月が輝く姿を見て「思いがけず」心がかき立てられて悩まされるという意味である．⑪は，留守の家のことを思うと一つのことにも乱れて「どうしようもない」という意味でとれる．⑫も，雪を見に行きたいがそれは許されないため，「どうしようもなく」家に座って遠望するだけという意味である．いずれも中国における「無端」の意味用法を概ね踏襲していることから，漢文脈に基づいた「無端」の本来的用法もある程度日本に受容されていたと見られる．

2，南北朝期以前の「無端」と和語

次に「無端」の訓として早くから見られる「あぢきなし」と「はしなし」について南北朝・室町以前の様相を確認していく．

2-1　あぢきなし

まず「あぢきなし」については，中古から「無端」の訓として現れる．

藤原公任選とされている『大般若経字抄』には，

⑬无端　アチキナシ　第三分无縁云々　ヨシナシ

とある．本書は『大般若波羅蜜多経』（以下，『大般若経』）本文の単字や熟語に対する注を施したものだが，「无端」に対して「アチキナシ」という和訓が記されている．また，その後の注では『大般若経』の第三分の文には「无縁」があり，その和訓が「ヨシナシ」だということを言っている．『大般若経』において「無端」が登場する記事は次の通りで，写経の際の心身の錯乱を言っているようである．

⑭書㆓一写般若波羅蜜多甚深経㆒時，頻申㆓欠呿㆒，無端戯笑，互相軽凌，身心躁擾，文句倒錯

これは第二分魔事品第四十四に登場する文言だが，第三分魔事品第十四にはこれと同様の文言で「無端」が「無縁」に置き換わったものが記されており，『大般若経字抄』の記述はそれを踏まえてのものであろう．この記述によれば，選者といわれる公任にとっては少なくとも右の文脈における漢語「無端」に対応する和語は「あぢきなし」であることがわかる．また，「無縁」＝「よしなし」との関連についていえば，「無端」の「根拠がない」，「謂れのない」などの意味は「よしなし」とも通じるものである．

また，『遊仙窟』にも次のようにある（本文中，「ハラワタノ」と「アチキナク」は本来漢字文字列の左部に記載されたものである）

⑮旧（モト）来（ヨリ）心肚（ハラワタノ）熱（アツケレハ）無端（アチキナク）強（シヒテ〔アナカチニ〕）熨（ノス〔ノハス〕）レ他（人）　（醍醐寺本，二十二丁オ）

この「無端」に関しては陽明文庫本，真福寺本ともに「アチキナシ」という訓を記しており，やはり「無端」と「あぢきなし」が対応していることがわかる．

ここで，なぜ「無端」に対する訓が「あぢきなし」なのかについて考える．小学館『古語大辞典』では中古語の「あぢきなし」の本義を「どこまでも条理をわきまえず，どうしようもないさま」とし，「無道だ」や「どうしようもない，せんない」，「つまらない」，「やるせない」などの意味を挙げるが，このような「あぢきなし」の「どうしようもない」という語義は，前述の「無端」における意味とよく通底しよう．

さらに，より広範な「無端」の意味との関連を考えるならば，宮武利江氏の「あぢきなし」についての論考が参照される[1]．宮武氏は『源氏物語』中の「あじきなし」の用例を分析することにより，「あぢきなし」の基本的語義を構成する要素として「想定外」を提起した．氏によれば自分の想定・期待といったものと合わないところから，思うようにならない事態に落胆したりそれを慨嘆したりする気持ちが生まれ，そうした事態に対する「どうしようもない」状態や，傍観の感情をも意味するようになるという．

それを踏まえると，「無端」そのものも「思いがけない」などの意味に加えて，「どうしようもない」という意味を派生的に表し得るのであるから，こうした意味の並存関係が「無端」と「あぢきなし」の親和性を支える根拠の一つであったと思われる．実際，先の『遊仙窟』や『大般若経』の「無端」は副詞的に「どうしようもなく」と解することができるほか，文脈上「意外性」や「想定外」を含むものといえよう．いずれにしろ，平安初期から中期にかけては「無端」を「アヂキナシ」で訓じることが行われ，またそこには相応の背景，根拠があったということは確かである．

これに関連し，『訓点語彙集成』によれば，「無起」を「アチキナク」と訓んだ例もある（「大毗盧遮那経義釈」大治 3 年点，原本未見）．「無起」は「果を生ずる因がないこと」（『仏教語大辞典』）という意味であり，これを踏まえると，「あぢきなし」は事態の根拠不明性や突発性等を表す意味を広く有するものとして認識されていた可能性もある．また後述するようにこの時代にあって「はしなし」が「思いがけず」の意味を表しうるものではなかったことも考慮すると，「あじきなし」は「無縁」，「無起」そして「無端」の訓として当該の意味も派生的に担うことができたのではないかと考えられる[2]．

辞書類を見ても，この「無端」と「あぢきなし」との対応は広く受け入れられていたと思われる．図書寮本『類聚名義抄』の「無端」の項にも，

⑯無端〔真云―緒，凡物及事，緒也，首也，今案初分也，忽然，第三分云無縁，其義一也，アチキナシ，公云〕

とあって，最初に「端」の字義と「無端」の語義を説明した後，最後に「アヂキナシ」という和訓を記している．さらに「公云」とあることから，公任による『大般若経字抄』を引用したことがわかる．また，ここでは「忽然」という意味記述があることから「無端」の突発性・意外性の意味が特に認識されていたことが窺えるほか，「無縁」について「其義一也」とあるように，「無端」と「無縁」の類義関係についてもより明確に言及している．三巻本『色葉字類抄』（前田本）にも，

⑰無為アヂキナシ　无事同　無端同　不用同

とある．

このほか，漢字仮名交じり文では，『三宝絵』（観智院旧蔵本）の序文に，

⑱碁ハコレ日ヲ送ル戯ナレト勝チ負ケノ太身無レ端シ（営ミ阿知木無シイ本）

とあり，この「無端」は異本注記に「阿知木無シ」とあることに従えば「あぢきなし」を表し得たものと見てよいであろう．意味的にも「あぢきなし」の「つまらない」といった語義と合致する．

また『今昔物語集』には「無端」の用例が散見される．以下に全用例を挙げる．

⑲悲クテ，頭ノ毛太リテ，怖ロシク無端ク思ユ．（巻第十二，第三十四）

⑳漸ク年積テ老ニ臨メレバ，世ノ中ヲ哀レニ無端ク思テ，（巻第十五，第十一）

㉑年来ノ嫗ニ罷送レテ，此ノ七年，世ノ中ヲ無端ク思エ候ママニ，（巻第十九，第三十七）

㉒彼ハ汝ヲバ何トモ思フマジケレドモ，無端キ事也．（巻第二十五，第四）

㉓殺テ来ニタレバ，為ベキ様モ無テ，無端ク塗籠ニ居テゾ泣ケル．（巻第第二十六，第五）

㉔「無端ク物咎メシテ異名付タル」トテナム，

基増悔シガリケル．
（巻第第二十八，第八）

㉕身ニ重キ病ヲ受ケテ日来煩ヒケルニ，世ノ中ヲ無端シト思取テ出家シテケリ．
（巻第三十一，第四）

以上の「無端」に関して『日本古典文学大系』と『新編日本古典文学全集』はすべて「あぢきなし」で解釈している．いずれの用例も「どうしようもない」あるいは「つまらない」といった意味を表していること，および仮名で形容詞活用語尾を表していること等を勘案すると，ここでの「無端」は「あぢきなし」を漢字表記したものと見てよいであろう．

以降，鎌倉期においても「無端」を「アヂキナシ」と訓んだとわかる例として，以下のものがある．

㉖枳利王之十異無端（アチキナシ）．廻（ハルカニ）契ニカス像教之流通ニ　（『鎌倉遺文』釈智照等表白）

㉗応ニレ恨ムニ行テ而不ニレサルヲ交ラ．何ソ無端（アチキナクモ）睡ニラムニ密室ニ乎（ヤ）．　（『如来遺跡講式』）

㉖の文意はとり難いが，「途方もなくどうしようもない」の意で，㉗は「つまらなくも」という「あぢきなし」の意味で解釈できる．

以上，南北朝・室町期以前の「無端」と「あぢきなし」を巡っては，両者の対応関係はある程度一般化していたと見られる．

2–2　はしなし

次に「はしなし」についてだが，「無端」に訓として「ハシナシ」と記された早い例は，管見の限りは『日本書紀』古訓である．『日本書紀』巻第二十二，推古天皇 12 年の，

㉘是非之理，詎能可レ定．相共賢愚如ニ鐶無端ニ

という文言における「無端」に対して，岩崎本と守晨本では「端」の横に「ハシ」という傍訓を記し（「無」には傍訓なし），兼右本では「無端」の横に「ハシナシ」という傍訓が記されている．

また中古・院政期においては，『三教指帰』の久寿 2 年点には「無ク端シ」とある（『訓点語彙集成』による）．『三教指帰』本文での該当箇所は以下の通りである．

㉙其魚類，則有ニ慳貪，瞋恚，極癡，大欲ニ．長頭無端，遠尾莫レ極

鎌倉期には，『日本書紀』の例が慣用化したと見られる「はしなし」が見られる．

㉚是非ノ理ハ誰カ能ク可キレ定．相共ニ賢愚ナル事タマキノハシナキガ如シ．（『五常内儀抄』）

㉛聖徳太子十七ケ条の御憲法に，「人皆心あり．心各執（しゅ）あり．彼（かれ）を是（ぜ）し我を非（ひ）し，我を是し彼を非す，是非の理，誰かよく定むべき．相共に賢愚（けんぐ）なり．環（たまき）の如くして端（はし）なし」
（高野本『平家物語』巻第二，教訓状）

南北朝・室町期以前の「はしなし」の用例は以上であるが，この時期にあって「はしなし」という語の性格を考える際には注意を要する．確かに上の「はしなし」は「無端」を訓読したものではあるが，表しているのはいずれも「果て・始まりがない」という意味のみで，冒頭で『角川』を引用して説明した「これという理由もなく．卒爾に．ゆくりなく」という意味（以下，こうした意味に言及する際には「思いがけず」の意味と統一的に記述する）までをも表すには至っていない．当該時期に見られる「はしなし」はあくまで「無端」を直訳的に訓読することで「端（果てや始まり）」が「無い」という「無端」の基本義を分節的に言い表したものであり，「無端」由来の「思いがけず」という派生的意味を表すような語彙的単位の位置を占めてはいなかったと考えられる．それは，南北朝・室町期以前に見られる上記の「はしなし」の確例数が『日本書紀』の用例が慣用化したものも含めて少なく，また「あじきなし」と異なり古辞書類に記述そのものがないことからも窺える．すなわち，この時期において「はしなし」は和語の中にあって，一語として熟して「思いがけず」の意味を表し得る段階には至っていなかった（少な

くともそのような語として認識されるものではなかった）蓋然性が高いということである．前述の通り，この時期に「無端」の当該語義を担い得る和語としては「あぢきなし」を想定しておきたい．

3，和語間の関係

この節では，南北朝・室町期における「無端」と和語の関係について，この時期から見られる「はしたなし」の出現過程と「あぢきなし」，「はしなし」，「はしたなし」の並存形態に焦点を当て，『太平記』の用例を中心に論じていく．

ここで，改めて冒頭にも挙げた『太平記』に見られる「無端」の用例をすべて掲出する．

㉜宮ニ追着進セント急ケルニ，芋瀬ノ庄司無レ端道ニテ行合ヌ．
（巻五，大塔宮熊野落事）

㉝サル程ニ両家ノ軍勢，二月六日ノ巳刻ニ，端ナク豊嶋河原ニテゾ行合ケル．
（巻十五，大樹摂津国豊嶋河原合戦事）

㉞是モ夜深テ帰ケルガ，無レ端樋口東ノ洞院ノ辻ニテ御幸ニゾ参リ合ケル．
（巻二十三，土岐頼遠参二合御幸一致二狼藉一事付雲客下レ車事）

㉜は足利尊氏軍と新田義貞・北畠顕家軍が摂津国豊嶋河原で出くわした場面，㉝は婆娑羅大名の土岐頼遠が笠懸の帰りに酩酊状態で光厳上皇の牛車に行き会った場面である．

これらにおける「無端」の意味はいずれも「思いがけず」で大体文意が通ろう．すなわち，漢語としての「無端」が有する意味に準じたものと見てよい．

そして本文に関して，㉜～㉞の傍線部を西源院本，玄玖本，義輝本，梵舜本，神宮徴古館本（以下，神宮本），寛永元年古活字本（以下，寛永本）で比較してみると，次のようになる．

	西源院本	玄玖本	神宮本	義輝本	梵舜本	寛永本
㉜	ハシタナク	無端	端ナク	無端	無キレ端	はしたなく
㉝	端ナク	端タナク	無クレ端	ハシナク	端ナク	はしたなく
㉞	端ナク	端タナク	端なく	無クレ端	無レ端	はしたなく

諸本の位置付けに関しては，西源院本，玄玖本，神宮本はいわゆる古態本で，義輝本，梵舜本は古態本の巻構成等を改変した別系統の古写本とされる．また，寛永本は流布本に属し，前掲の日本古典文学大系依拠の慶長8年古活字本も流布本の1つである．現存本の成立年代については，西源院本が大永・天文年間（祖本は応永19年以後，同28年以前と推定），玄玖本は室町末期（天文23年頃か），神宮本は弘治元年書写のものを永禄3年転写（ただし，巻10・15・22～24は欠．今回は翻刻本として長谷川端等編『神宮徴古館本太平記』（1994年，和泉書院）を使用したが，同本では神宮本と同系統に属する室町末期写の松井本によって補っており，本稿でもそれに依拠した），義輝本は室町末期，梵舜本は宝徳元年写の祖本を長享・延徳年間に書写し天正年間に再度書写したものである[3]．

諸本の記載を見ると，漢字表記のみのものは判定し難いものの，傍訓や送り仮名から，一部「あぢきなし」が見られるほかは概ね「ハシタナク」，そして「ハシナク」のいずれかが記述されているのが分かる．異同は錯綜しているといってもよく，整合的な系統関係は見出し難いが，その具体的背景等は後述することとし，この時に至って「はしなし」が「思いがけず」という辞書的意味を獲得したということに注目したい．以後室町中後期において当該の「はしなし」の確例が見られるようになる．

㉟無レ端〈言不二思寄一義也〉
（『文明本節用集』）

㊱「後ヨリ追付奉レ」ト走ケルホドニ，無レ端当初ノ管領評定所カト覚シキ庁庭ニ着ヌ．
（『地蔵菩薩霊験記』巻三）

㊲ふしみ殿よりねんしの御たる三色，三かまいる．ついたちに御まいりなるにより，はしなくともものよし御申なれとも，めてたく御まいりあるへきよし御申にてなる．
（『おゆどののうへの日記』　私に漢字表記を注した）

以上の状況を見ると，こうした「はしなし」の

出現には『太平記』における用例が一定の契機になっていることが予想される．『太平記』においては同様の文脈の中で「はしたなし」が登場するという動きも起こっているが，両者の動きには関連するところもあるため，まず「はしたなし」について検討し，その中で再び「はしなし」の変化について言及する．

3-1 「はし」と「はした」

管見の限り，「無端」と「はしたなし」が対応した例は『太平記』の用例以前には見られないが，少なくともその対応関係が構築される土台は存在していたことが窺える．そのことを，「はし」と「はした」，およびその漢字表記について検討することを通して確認する．

「はしたなし」の語構成についてはすでに西宮一民氏，岩村恵美子氏，蜂矢真郷氏等が「ナシ型形容詞」についての考察の中で明らかにしているように[4]，「はした」に程度強調の接尾語「なし」（いわゆる「甚し」と呼ばれてきたもの）がついたもので，その「はした」は，「はしたなり」という形容動詞の語幹として理解でき，元来「物事のどちらともつかないこと．どっちつかずで中途半端なこと．またそのさま」（『日国』）を表すものであった．よって程度強調の「なし」が下接した「はしたなし」の原義も「中途半端でどっちつかず」なさまとされる．また，そこから派生して，物事の「調和」や「適合」が保たれていない様子を表すようになり，それが人の心情における場合には「きまりが悪い」という意味を表し，また人や物事の他に対する態度における場合には「無愛想」や「不作法」といった意味を表し，さらにそれと関わって，行為や現象の程度が「激しい」，「甚だしい」といった意味も有したとされる[5]．

こうした「はしたなし」の「なし」は「無し」と区別されるものであるが，漢字表記のうえではかなりの程度「無し」として認識されていたと思われる．『今昔物語集』には「半無」と表記された語が11例あり，また『色葉字類抄』には「間ハシタ半同」とあって，「はした」の漢字表記として「間」と「半」が記載されている．すなわち，『今昔物語集』の「半無」は「はしたなし」を表記したものであり，少なくとも平安末期から鎌倉初期には「はしたなし」はすでに「はした」＝「半」＋「無し」として理解されていたことがわかる．また，鎌倉中期の『名語記』でも「はしたなし」の「なし」は「無也」と説明されている．

ここでさらに，「はし」と「はした」について時代を遡って考える．例えば『万葉集』には，次のような「はし」が見られる．

㊳新田山　嶺には付かなな　我に寄そり　はしなる［波之奈流］児らし　あやにかなしも　（巻十四，三四〇八）

この歌の「はしなる」について，『万葉拾穂抄』が「いつかたにもつかす，はしたなる心也」と注するのをはじめとして，諸註釈の多くは「中途半端な状態」の意で解している．この「はし」について，『時代別国語大辞典　上代編』は

㊴うち嘆き　萎えうらびれ　しのひつつ　争ふはしに［波之尓］　木の暗の　四月し立てば　（巻十九，四一六六）

などの歌に見られる「あいだ．事態の交錯する時の意をあらわす形式名詞」である「はし」が，「どっちつかずの中途半端なさまをあらわす」「情態的意味に転じた」ものと説明している．『万葉集』には，

㊵いとのきて　短き物を　端切ると［端伎流等］　言へるがごとく　（巻五，八九二）

のように，事物の末の部分を表した「端（はし）」が見られる一方，例えば，

㊶梓弓　末は寄り寝む　まさかこそ　人目を多み　汝をはしに［波思尓］置けれ　（巻十四，三四九〇）

という歌の「はしに置く」が「端の方におけれ也」（『万葉考』）や「端の簀の子などにをらするを云也」（『万葉集略解』），あるいは「末端に置く，粗末に扱う」（伊藤博『万葉集釈注』）というように

説明されることもあれば，「半たにては置たれという心也」（『万葉集管見』）や「はしたにしておけとなり」（『万葉代匠記』初稿本）などと説明されることもあるように，「はし」が「末端」という意味と，㊳の歌と同じ「中途半端の意」（澤瀉久孝『万葉集注釈』），すなわち「はした」のような意味の両様に解される場合もある．

以上のように，上代において「はし」という語には「末端」という意に加えて「間」から転じた「中途半端」という意も認められるのである．中古になると，後者の意は専ら「はした」が表すようになるが，あるいは「はした」はこの「はし」から，当該の意味を特立的に表すものとして派生したとも考えられる．

ただ，院政期～鎌倉期の古辞書類を見ると，図書寮本『類聚名義抄』には「端玉云都丸反ハシ巽サキ集」とある一方，「アヒダ端」という記述もあり，さらに『色葉字類抄』（前田本）には「間アヒタ古間反魄際子例反来夜一端旬項比已上同」とあるように，漢字表記のうえでは「はし」という語には「端」に加えて「間（あいだ）」も対応していたことが確認できる．そして，先述の通り『色葉字類抄』では「間」と「半」に「はした」も対応する．つまり，「はし」には「端」の意に加えて「間」＝「はした」の意味も認められていたとみなすことができる．

実際，古今和歌集の，

㊷木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわが身はなりぬべらも　（雑歌下，九五九）

という歌の「はし」については，院政期～鎌倉初期の歌学書からすでに「中途半端」＝「はした」（半）と解釈されている．例えば顕昭の『古今集註』では「教長卿云ハシハヽイタナル半ノモノニナリテイヅカタニモツカズトヨメリ」とあり，藤原教長の説として「半ノモノニナリテ」と述べるほか，『八雲御抄』は「はしに　なか半也　はしたとも云」と注し，また『僻案抄』では「はしに我身とは．はしたになりぬるよし也」とする．

右のことからは，少なくとも「はし」，「端」，「はした」，「間」，「半」の意味上・表記上の対応関係は，中世に入った段階でも一定程度認識されていたことが窺える．こうした語義意識や表記意識には，上代において「はし」が有していた両義性が少なからず関わっていたであろう．

以上のことを踏まえ，改めて「無端」と「はしたなし」について考えると，「端」と「はした」との関連性や『今昔物語集』の表記から窺える「はしたなし」の「なし」を「無」とする意識も勘案すれば，「はしたなし」を「端」と「無」を用いて表記する例が早い頃にあってもよさそうに思われるが，前述の通り，実際には鎌倉期においてもそのような例は見出されない．

これはなぜかと思うに，漢語としての「無端」の存在が関わっていたからと推測される．和語「はしたなし」の意味用法を見ると，特に中古においては先に挙げたものが大多数であって，漢語「無端」の漢文脈での意味用法を踏まえた（果て・始まりが無いという意味での）「はしなし」や「あぢきなし」と比べ，「無端」と意味的に通底するところが中世初期段階においても少なかった．この相違をまったく無視してまで「端」と「無」で表記することには相応の抵抗があったと思われる．つまり，南北朝・室町期以前は「はしたなし」に「端」と「無」をあてるということについては，その土台は存在しつつも漢語「無端」の存在から一般的な段階には至らなかったということである．

3-2　「はしなし」の変化と「はしたなし」

以上のような南北朝・室町期以前の「はしたなし」の語構成意識と漢字表記に関する前提を踏まえつつ，『太平記』において，「無端」を巡って「思いがけず」という意味を表す「はしなし」やさらに「はしたなし」も登場する過程・背景は次のように考えたい．

「果て・始まりが無い」という「無端」の意味を担う訓として前代にも存在していた「はしなし」が同じく「無端」の「思いがけず」という意外性・突発性の意味をも担うようになるという意味変遷には何か外在的なものが関与している可能性が高いと予想される．

稿者はそれを，漢詩文，特に南北朝・室町期における五山僧を中心とした漢詩文における「無端」の存在と推測する．頁下部の表は『五山文学全集』

収録作品を中心とした鎌倉後期から室町後期にかけての五山僧の手による詩文集における「無端」の総用例数と，そのうち副詞的に用いられている用例の数，そして副詞用法のうち「思いがけず」に類する意味を表している用例の数をまとめたものである．

表を見ると，一部例外もあるものの，概ね「無端」は副詞的に用いられているのが確認できる．また，管見の限りそうした「無端」はほぼ「思いがけず」とか「はからずも」の意を表しているのである．従来，『太平記』の成立には五山禅林の存在が関わっているという指摘がなされているが[6]，それを踏まえると，当時隆盛した五山文学における漢詩において「思いがけず」という副詞的意味を特立的に表していた「無端」が『太平記』本文に積極的に導入されたという過程は十分可能性があることであろう[7]．

そして，こうした漢詩における意味用法を踏まえた「無端」を「訓む」，すなわち何らかの和語を対応させるという行為を想定したとき，それまであった「あぢきなし」に対しては相応の抵抗があったと予想される．中古～鎌倉期の和文や漢字仮名交じり文での「あぢきなし」は「無端」の意味に留まらない多様な意味を有しており，加えて『今昔物語集』での用例や鎌倉期の「アヂキナシ」訓がある「無端」を見ると，「あぢきなし」の「どうしようもない」に関わる意味を表す傾向が強いことが看取される．つまり，「あぢきなし」はその資格はありつつも当該語義を端的に表すことが難しかったのではないかと予想される．そして「はしたなし」もこの段階では即座に「無端」とは結びつき難い．

そこで，この意味をより弁別的に示すための存在として，「ハシナク」という訓が登場したと考えられる．前代には「無端」を直訳的に「ハシナシ」と訓んで「果て・始まりがない」を意味する用法が確かに存在していたが，この意味は副詞的に用いられることは希有であろう．であれば，「思いがけず」を意味する際に「はしなし」が連用修飾あるいは副詞として用いられれば，自ずと「果て・始まりがない」を表す「はしなし」との意味的齟齬は回避される蓋然性が高い．結果的に，「はしなし」に「思いがけず」・「はからず」などの副詞的意味が付与されることになるのである．

そして前述の通り，『太平記』において当該の意味用法が登場したことが1つの画期となり，室町期における他文献へも上記のような「はしなし」が波及していったと考えられる．つまり，中世後期における「はしなし」に関する動向の実態としては，「思いがけず」という意味を特立的に表す「無端」の，五山文学を通した『太平記』への流入と，それをきっかけとした当該語義を担う訓読語

作品名	作者	年代	「無端」総数	副詞用法	「思いがけず」に類する意味（確例）	例
東帰集	天岸慧廣	鎌倉後期	2	2	2	願海無端成苦海。
禅居集	清拙正澄	鎌倉後期～南北朝期	3	3	3	無端高索遼天。
松山集	竜泉令淬	南北朝期	9	7	6	無端医寓洛陽城。
天柱集	竺仙梵僊	鎌倉後期～南北朝期	3	3	3	担久無端病気生。
若木集	此山妙在	鎌倉後期～南北朝期	4	3	3	無端一喝滅吾宗。
随得集	龍湫周澤	南北朝期	4	2	2	無端昨夜嵐風悪。
空華集	義堂周信	南北朝期（永和頃）	11	9	9	無端惹得衆人咍。
了幻集	古劔妙快	南北朝～室町初期（永和頃ヵ）	12	12	9	達磨無端返竺乾。
草餘集	愚中周及	南北朝～室町初期	3	3	3	腋下無端汗出耳。
雲壑猿吟	惟忠通恕	南北朝～室町初期	3	3	3	無端拾得一篇詩。
竹居清事	翱之惠鳳	室町初期～室町中期	3	2	2	無端一句更参尋。
梅花無尽蔵	万里集九	室町中期～後期（最終年記は文亀二年）	25	16	16	逆旅無端高枕臥。
翰林葫蘆集	景徐周麟	室町後期	21	20	19	無端戸外起看日。

としての「はしなし」の出現・波及という過程が想定されるのである[8].

さらにこの「はしなし」の変化がある程度一般化する中で,「はしなし」と語形が近似するとともに，漢字表記のうえで「無端」と潜在的な結びつきを持つ「はしたなし」へも影響が及び,「無端」と「はしたなし」が接合する余地が生まれてきたと考えられる．ここに「無端」との意味的関連も加味するならば,「思いがけず」という意味に対しては先にも述べた「はしたなし」が本来有する「具合の悪さ」や「不都合さ」等の副次的意味を付随させてもそれほど文意が損なわれない場合が想定できる．例えば先述の『太平記』の用例㉞では泥酔した土岐頼遠と光厳上皇の遭遇を「無端」と表現しているわけだが,「思いがけず」行き会ったという意外性があるのはもちろんのこと，そこに「不都合さ」を見出すことも可能であろう．つまり,「はしなし」が「無端」と「思いがけず」という意味において対応したことによって，それを媒介として「無端」と「はしたなし」の意味領域が接続することになるのである．

その結果,「はしたなし」と「無端」が対応するようになったと考えられる．もちろんこの過程の背後では,「はしたなし」を「はした」+「無し」および「はした」=「はし」=「端」と解釈する前代までの語構成意識や表記意識も関与しており，この対応関係を促進する働きをなしたと予想される．

3-3 「無端」と和語群の関係性について

以上のようなプロセスの結果，少なくとも「はしなし」は「果て・始まり」が「無い」という意味を分節的に表す段階から「思いがけず」などの派生的意味を表す段階へ推移したとみなすことができるが，この意味は「はし」が「無い」という語構成からは復元し難い特殊な意味であり，ここにおいて「はしなし」は一定程度自立した語彙的単位へ発展したことが想定される．また同時に,「はしなし」に加えて「無端」の訓読語としての「あぢきなし」，漢字表記も関わる形で「無端」と対応する「はしたなし」という複数の和語が「無端」と関係を結ぶようになった.『太平記』の種々の写本が発生した室町後期〜末期における当該語を巡る状況は以上のようであったと考えられる．

『太平記』諸本を見る限り，これらの和語，特に「はしたなし」と「はしなし」が混淆されていたように見受けられるが，一方で全面的にそうなったとも言えない．そこで，次に「無端」に関わるこれらの和語相互の並存関係の実態について検討する．

『太平記』には,

㊸これは元来田舎人なりければ，物妬み<u>はしたなく</u>,
（巻第二十二，佐々木信胤成宮方事）

という文言があって，ここでの「はしたなく」は行為・現象が「激しい」さまを表すものだが，ここの表記で「端」や「無」を用いている諸本は管見の限り確認できないのである．

ここからは「思いがけず」に類するような意味,すなわち「不都合さ」や「具合の悪さ」を付随させる余地を残す意味を表す場合に限って「はしたなし」が殊更「端」と「無」という表記と対応する傾向があったということが窺える．つまり，そのような場面では「はしなし」と「はしたなし」の双方が個人の文脈意識に基づいて使用され得るということを意味し，それが記載の揺れにつながるのである．先に挙げた『太平記』の例はいずれも誰かと誰かが行き会う場面を描いているが，それぞれにおいて単純に「思いがけず」という意味のみを認めるか，または「不都合にも」とか「具合悪く」というような「はしたなし」関係の意味をも認めるかは容易に決定し難く，文脈意識に依存する部分が大きいといえるだろう.『太平記』の諸本間における「はしなし」と「はしたなし」の錯綜した異同は，書写時点である程度一般化していた当該 2 語に対する，書写者個人の語義認識や文脈意識が介在した結果を反映していると捉えることができるのである[9].

次に「あぢきなし」に関して考える．日本古典文学大系所収の『太平記』本文における「あぢきなし」の用例を前後の文とともに掲出すると以下のようになる（該当箇所以外の振り仮名は省略し

た）．

㊹御謀反ニ与シヌル間，千ニ一モ命ノ生ンズル事難シ．無レ端（ナク アヂキ）存程ニ
（巻一，頼員回忠事）

㊺明日ノ命ヲモ憑レネバ慧（アヂキナク）思ハヌ人モ無リケリ　（巻十六，将軍筑紫御開事）

㊻穴無端（アナ ナ アヂキ）ヤ．縦主アル人ニテモアレ，又何ナル女院・姫宮ニテモ坐マセ．
（巻十八，春宮還御事付一宮御息所事）

㊼天下皆魔魅ノ掌握ニ落ル世ニナランズラント，アヂキナク覚ヘケレバ，
（巻二十一，先帝崩御事）

これらの部分について，本稿で挙げた諸本を見ると，梵舜本が第一例を「无レ情ケ」（ただし，「情」の横に「端歟」の傍記）とするほかは，「無端」表記のものや異なる漢字を「アヂキナシ」と訓むものが中心であって，訓そのものに大きな揺れはない．

文脈上，右の用例はすべて「あぢきなし」の意味領域によく適合したものである．ここで「無端」という漢字表記が存在するにも関わらず「はしなし」，「はしたなし」等の訓が現れないということは，「あぢきなし」の意味領域と「はしなし」，「はしたなし」の意味領域が重ならない範囲においては「無端」との対応のあり方に棲み分けがあったことを示す．

ただし，「あぢきなし」を巡って揺れが生じ得るケースもある．例えば室町時代成立の御伽草子である『精進魚類物語』に次の用例がある（本文は群書類従本による）．

㊽夫何の世々にもあひがたき鯰経にあふ事を得たり．無端も此鯖世界をふり捨て或は入道いるかとなり，

この「無端」の部分を『日国』や『角川』は「はしなし」の用例として挙げるのだが，これを「はしなし」と対応させるのはためらわれる．

『精進魚類物語』は大きく古本系統と流布本系統に分けられるが，古本系統でこの「無端」に該当する箇所を見ると，表記なしか，「鯰花無（あぢ け なく）」（阪本龍門文庫蔵本），「鯰華無（アチ ケ ナク）」（東京大学蔵寛永頃刊本）となっており，漢字表記はさておき，振り仮名から「あぢきなし」が対応していることがわかる．流布本系統でも該当箇所は「無レ端（ナク アヂキ）」（神宮文庫蔵本）や「無レ端（ナク アチキ）」（静嘉堂文庫蔵本）などとなっており[10]，この「無端」は「あぢきなし」でとったほうがよいと思う．とはいえ，「はしなし」をあてて「思いがけず」と解釈しても文が通らないわけではない．『日国』や『角川』がどのようなものに依拠して当該箇所を「はしなし」と解釈したのかは不明であるが，少なくとも文脈のうえで種々の訓が許されるケースであるということは言えよう．

以上のように，和語間の意味領域が重なる文脈において「無端」が存在する場合，当該の和語の対応関係には揺れが生じる余地が出てくるのである．「無端」と種々の和語が対応するに及んで，当該語群の中においてこうした一定の並存関係が生じたということが，中世後期において注目すべき動向であると考える．

4，漢語・和語の相互影響
―― 近世の様相を中心に ――

4-1 「はしたなし」と「無端」の語義認識

中世における以上のような動向を受け，近世においては「無端」および関連する和語群の間で語義認識や表記などを巡って相互的な影響が見受けられるので，次にその様相を確認していく．

まず近世には，『太平記』から見られた語彙的単位としての「はしなし」の用例が散見されるようになる．ただし，管見の限り用例は近世後期のものに限られる．

㊾かの笛を懐にして急下の森迄来しに，影向の松のほとりにて，はしなく上人と行遇たり．
（『和漢嘉話宿直文』巻之四）

㊿四更ばかりに，はしなくまくらもたげて見やりたるに，月朗明にして宛も白昼のごとくなるに，　（『新花摘』）

㊶這日も犬掛なる，長畷の辺にて，端なく敵と撞見しけり．
（『新局玉名童子訓』巻三十）

㊷吾は如此々々の者を尋ねて，端なくこゝまで来たれるなり．　（『松亭漫筆』巻之下）

これらの「はしなし」は，思いがけず」という意味で引き続き用いられていると見てよい．

また「はしたなし」については以下のような用例が確認できる．

㊸私用アツテ江州森山ニ趣キケル程ニハシタナクモ義経ニ行逢ヒシガ，
（『義経勲功記』巻之五，1853年刊行の版本利用）

㊹けふ遠山の君にはしたなくあひ奉りしが，我にもあらぬやつれ姿のなめげなれば，つれなくて過奉りし．　（『後松日記』巻之九）

これらの「はしたなし」の用法は『太平記』に見られたものと類似しており，意味的には「はしなし」と近い．これは「はしなし」と「はしたなし」とが，「思いがけず」という意味を巡り近似的になっていることを示しており，当然この前提には，中世における「無端」を介在した両者の接続関係があったと思われる．

近世におけるこうした関係性をさらに示すものとして辞書類における記述がある．例えば『雅言集覧』では「はしたなし」について次のような説明になっている（本文は『増補雅言集覧』（1965年，臨川書店）によった）．

はしたなし　なしは無の意にあらず．はしたなる意にてはしたに同く，ドチラヘモツカズよるべなき意也．又メツタニの意なるはヨルベナキヲモカマハヌ意より転じたる也．又フツガフの意もあり．ツキガナイ，俗にテレルといふもツキノワルイ意也．ツキガナイ故カツカウガワルイ意なるも，又コマル意なるも，情ナクキビシキ意なるもあり，すべてヒヨンナコトなどのヒヨンナの意也．

「はしたなし」のさまざまな意味を説明しているが，ここでは最後の「ヒヨンナの意」という記述が注目される．「予期に反して不都合なこと，異様なことについていう．思いがけない．意外な．また，妙な．」（『日国』）という「ひょんな」が「はしたなし」の意味として解釈されていることは，「はしたなし」に「はしなし」および「無端」と近似した意味が明確に見出されていることを示している．このことは，近世後期に種々刊行された雅俗語対訳辞書の記述にも現れている．例えば文政4年の『雅語訳解』では「はしたなし」に対して以下の俗語をあてている．

ツキモナイ　思ガケナイ　ツキホガナイ　ヒヨンナコト　フツガフナ　フサウオウナ　フツツカナ

ここでは「はしたなし」に対して「ひょんなこと」という意味とともに「思いがけない」という意味も見出されている．

こうした意味記述は中世には見られなかったものであり，これら辞書類の記述から，近世においては「はしたなし」と「はしなし」および「無端」との意味的近似がより顕在化していたといえる．

これは，和語「はしたなし」が漢語「無端」とその訓読語としての「はしなし」の意味的影響を受けた例であるが，逆に「無端」も和語の影響を受けていたことが，近世に種々刊行された漢詩作法書[11]における語義注釈から窺える．

例えば明和5年刊行の漢詩作法書『詩語砕錦』における「無端」の説明は次のようである．

無ク レ端シ　ツガモナクと訳ス　無レ端（ナク ツガモマタ）更渡ル二桑乾ノ水（カハ）ヲ一　無レ端（ナク ツガモマタウタフ）更唱二涼州ノ曲ヲ一

「無端」を訓とともに掲出し，訳を説明した後，実際の漢詩の用例を記述している．ここでも掲出された「無端」自体は送り仮名からして「ハシナク」と訓んでいると思われるが，それとは別に「ツガモナク」という訳を記載している．「つがもない」は近世から見られる語で，「すじみちがたたない，不都合，ばかばかしい，たわいもない」（『日

国』）などの意味であるが，この語は，中国で用いられる漢語「無端」の意味よりもむしろ「あぢきなし」や「はしたなし」の意味に通底するものといえる．すなわち，「あぢきなし」や「はしたなし」という「無端」に対応する和語に規定された当代語によってその訳や語義が記されているのである．

この他，宝暦13年の『詩語解』では「無端」を掲出したうえで「端ハ首也．始也．無端ハ無ニキ端由ヨシ一也．（中略）無レ端詩思忽然トシテ生ス．猶ニ俚語ノ不合ノ一也．為ニリ奈何トモシ不レ得之辞一．」というように語釈を施しているが，これは中国における「無端」の意味をある程度妥当に解釈している．そのうえで，ここでも「俚語」の「不合」という語によって語義説明が行われている．「不合」は『日国』に「ふしあわせなこと」とあって，「仕合わせが悪い」という意味で考えれば，これは「はしたなし」に近接した意味と捉えることができる．

さらに天明2年の『詩工推鑿』では「無端」に対して「無シレ端タ」という訓を施しているが，これは「ハシタナシ」と訓まれ得るものであって，「はしたなし」と「無端」の表記上の対応関係が強く認識された故の訓読といえる．

以上のように，本来漢詩にも用いられる漢語「無端」の原義からは直接に導き難い語釈や訓の記載が行われており，これは「はしたなし」を始めとする前代までに見られた和語との対応が強く作用した結果といえ，対応する和語の存在が元漢語の語義認識に影響を与えた例とみなすことができる．

4-2　節用集における表記

右のような「無端」と「はしたなし」双方の影響関係に関連することであるが，近世においては両者が表記のうえでも明確に対応するという現象が主に節用集で生じている．大空社『節用集大系』に収録された節用集を確認する限り，元禄10年の『頭書増字節用集大成』における記載が，「はしたなし」が「無端」と表記された早い例で，以後の節用集においてもこの記載はほぼ網羅的に見られる．節用集間の踏襲関係も考慮しなければならないが，近世において「はしたなし」と「無端」との表記上の対応関係は強く意識されていたものと思われ，これは「無端」と「はしたなし」との間の意味的な相互影響と密接に連関していたであろう．

一方で，「あぢきなし」に対する「無端」の表記も近世初期の節用集類から普遍的に見られるほか[12]，「はしなし」も文化12年の『蘭例節用集』や文化13年の『大宝節用集文林蔵』に確認できる．

お　わ　り　に

以上，「無端」という漢語と，それに対応する「あぢきなし」，「はしなし」，「はしたなし」といった和語群の諸相を見てきた．その特質を通時的にまとめると次のようになる．

「無端」という漢語と意味的な近似性を持っていたが故に訓読のうえで対応した「あぢきなし」や直訳的訓読から生じたと思われる「はしなし」が存在していた状況の中で，「はしなし」の意味派生によって類似語形の「はしたなし」が語構成意識も伴いつつ「無端」と対応するという新たな動きが起きるのであるが，これは漢語とは別次元の和語間の関係性によって対応関係に影響が及んだ例と位置づけることができる．また，それによって「はしたなし」の語義認識において「無端」の意味が介入してきたり，「無端」の語義解釈にも「はしたなし」が関与してきたりといった双方向的関係性も生ずるが，これは本来別個に存在していた漢語と和語が対応することによって意味的な近似性を獲得するという漢語・和語対応の発展的形態とみなすことができる．

このように，ある漢語に対して種々の和語が対応する場合，そこには漢語から離れた和語間の関係性が作用するとともに，それを通して漢語のあり方にも影響を及ぼすことが想定されるということを「無端」の事例は示している．

加えて，特にその表記面に関して「あぢきなし」，「はしなし」，「はしたなし」が全面的に「無端」と対応するという一面的な関係があったのはなく，その意味領域の重なり度合いに応じて対応関係に峻別や揺れが生じるということも注目される．これは訓および和語同士がなぜ並存するのか，またその並存はどのような形態をとるのかということを

考える際に示唆的な事例を提供していよう．

以上のように，漢語と和語が相互にさまざまな要因を含みながら複層的な関係を構築していることを「無端」と一連の和語の検討を通して示したわけであるが，今後はさらにこうしたケースを検討・集積し，訓読による漢和の対応のみならず，漢語・和語間の派生や仲介を契機とした相互の多次元的な対応関係の構築という側面などをより精緻に分析することが肝要であると考える．

注

1） 宮武利江「『あぢきなし』の基本的語義」（『文教大学文学部紀要』二十巻一号，2006 年）

2） 竹内美智子氏は，前掲『遊仙窟』の「アチキナク」を現在の「はしなくも」という副詞と殆ど同じ意味としており，「あぢきなし」の「倫理・道理にかなっていない」意から「わけもなく・むやみと」などの意に転じ，「無端」の訓として用いられるようになったとする（竹内美智子「『あぢきなし』考」，『国語学論集・中田祝夫博士功績記念』所収，勉誠社，1979 年）．

3） これら『太平記』諸本の書誌情報に関しては，高橋貞一『太平記諸本の研究』（1970 年，思文閣出版）および長坂成行『伝存太平記写本総覧』（2008 年，和泉書院）等を参照した．

4） 西宮一民「いわゆる『甚し』について」（『論集日本文学・日本語』一・上代，1977 年，角川書店），岩村恵美子「ナシ（甚）型形容詞 —— 否定性接尾語を有する形容詞の考察」（『語文』六四巻，1995 年），蜂矢真郷『古代語形容詞の研究』（2014 年，清文堂出版）等参照．

5） 中西宇一「『はしたなし』の意味 —— その心情性と状態性」（『女子大国文』一〇六巻，1989 年）

6） 佐藤喜代治「太平記の文章」（同『日本文章史の研究』所収，明治書院，1961 年），また近年では森田貴之「『太平記』の漢詩利用法 —— 司馬光の漢詩から」（『国語国文』七十九巻三号，2010 年）等も参照．

7） この前提として，同時期の中国（宋・元）における漢詩の「無端」の意味用法の傾向も想定される．

8） 佐藤喜代治氏は『太平記』にはそれ以前には用例を見ない語がしばしば現れることを指摘しており（注 6，佐藤論文），また山本真吾氏は「おぎろ」という語の語史を考察する中で，太平記等の軍記物で使用されたことを契機として室町期においてその勢いを増したと述べている（山本真吾「『おぎろ（蹟）』の語史 —— 中世語の一つの流れ ——」，『国語語彙史の研究』二十三所収，和泉書院，2004 年）．これらの指摘を踏まえると，それまで見られなかった「思いがけず」の意を表す「はしなし」が，『太平記』における出現をきっかけとして一般化へ向かったという過程は十分想定されよう．

9） 『太平記』の伝本はそのほとんどすべてが「取り合わせ本」であるという指摘もあり（新編日本古典文学全集『太平記』④，長谷川端「解説」参照），書写段階で種々の諸本における記載が複合的に作用したことも想定される．

10） これら『精進魚類物語』諸本の本文は高橋忠彦・高橋久子・古辞書研究会編著『御伽草子精進魚類物語　本文・校異編』（汲古書院，2004 年）を参照した．

11） 「漢詩作法書」という用語は樋口元巳「江戸時代の啓蒙的漢詩作法書」（『神戸商船大学紀要 第一類 文科論集』二十九巻，1980 年）に随う．

12） 大空社『節用集大系』収録のものでは，慶長 16 年『節用集』から一貫して記載されている．

（補）本文引用資料の依拠本文は以下の通り（本文で明記したものは除く）．
孫子・史記，淮南子，文選，玉台新詠：『新釈漢文体系』明治書院／
＊ 本文で引用した『十一家注孫子』，『史記索隠』，『文選』張銑注，李善注はそれぞれ『十一家注孫子校理』（中華書局，新編諸子集成，1999 年），『史記索隠』（中華書局，叢書集成初編，1991 年），『景印宋本五臣集注文選』（台湾国立中央図書館，1981 年），『文選』（上海古籍出版社，中國古典文學叢書，1986 年）を参照し，訓点は稿者が記した．
後漢書：渡邉義浩他編『全釈後漢書』汲古書院／万葉集，日本書紀，今昔物語集，平家物語，新局玉名童子訓：『新編日本古典文学全集』小学館／古今和歌集：『新日本古典文学大系』岩波書店／三宝絵：小泉弘・高橋伸幸編『諸本対照三宝絵集成』笠間書院／大般若経字抄：『古辞書音義集成』汲古書院／三教指帰，経国集，菅家文草，菅家後集，新花摘：『日本古典文学大系』岩波書店／図書寮本類聚名義抄：菅原是善『図書寮本類聚名義抄：宮内庁書陵部蔵』勉誠社／色葉字類抄：中田祝男，峰岸明編『色葉字類抄：研究並びに索引』風間書房／観智院本類聚名義抄：菅原是善『類聚名義抄』正宗敦夫編纂校訂，風間書房／八雲御抄：木村晟編『古辞書研究資料叢刊』大空社／僻案抄：古今集注釈書影印叢刊一『僻案抄』勉誠社／五常内儀抄，おゆどののうへの日記，古今集註：『群書類従』／文明本節用集：中田祝夫『文明本節用集研究並びに索引』勉誠社／地蔵菩薩霊験記：榎本千賀他編『一四巻本地蔵菩薩霊験記』三弥井書店／和漢嘉話宿直文・松亭漫筆・後松日記・燕居雑話：『日本随筆大成』吉川弘文館／雅語訳解：鈴木朗編輯・村上忠順拾遺『雅語訳解大成』文華堂（明治年間出版）／詩語砕錦，詩工推鑿：新日本古典籍データベース（http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100088664，http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100224704）／詩語解：波多野太郎編『白話虚詞研究資料叢刊』龍溪書舎

The study on the history of the lexicon of kango
—— with a focus on *“無端”* ——

Shun SASAKI

Graduate School of Human and Environmental Studies,

Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary This paper aims at revealing the historical interplay of *kango*（Japanese words of Chinese origin）and *wago*（native Japanese words）in the history of Japanese lexicon, with a focus on describing the interrelationships between one of *kango*, *“無端”*, and some of *wago*.

Since the Heian period, *“ajikinashi”* and *“hashinashi”* had corresponded to *“無端”*, and in the Middle Ages, influenced by the usage of *“無端”* in Gozan literature,*“hashinashi”* distinctively began to express the meaning of “unexpectedness”that *“無端”* originally has, and with this transition of *“hashinashi”*, *“hashitanashi”*, whose original meaning dose not match *“無端”*,also began to correspond to *“無端”*. The correspondence of these words to *“無端”* shows a certain of confusion and distinction, depending on the extent of the overlaps between them. In the Edo period, the meaning of “unexpectedness” was recognized in *“hashitanashi”*, which suggests that the mixture of *“hashitanashi”*, *“hashinashi”* and *“無端”*.

In the historical process of the correspondence of *“無端”* with *wago*, not only the semantic relations between them but the several kinds of factors, such as notation or word construction, affects at the various levels, and this case can be considered as a suggestive example for the complicated relations between *kango* and *wago*.